

2-34-3 宇治御茶師（うじおちゃし）

宇治にあって碾茶の生産に携わっていた家を茶師と称していたが、江戸時代になって、将軍家御用をつとめる特定の家を御茶師と呼び、それが制度化された。

御茶師の人数は時期によりかなりの変動があったが、18世紀頃の記録では御物御壺を預かる上林家が茶頭取（代官家）に任じられその支配下で朝廷および将軍家直用の茶を調達する御物（ごもつ）御茶師 11 家、将軍が東照宮へ献上する袋茶を詰める御袋（おふくろ）御茶師 9 家、将軍家が一般に用いる茶を納入する御通（おとおり）御茶師 13 家が数えられ、それぞれが仲間を組織して、各々毎年 2 名ずつが交替でつとめる「年行事」を中心に茶壺道中に対応して茶の調達にあたり、相互扶助・独善的行為の阻止などにつとめた。これを「宇治茶師三仲ケ間」と言った。

茶師は自家の相続や将軍家の交替の際には、誓詞起請文や由緒書を提出して幕府の認可を受けなければならなかった。

茶師の身支配は京都町奉行があたり、茶の納入に関しては幕府勘定奉行支配下にある上林家の指示を受けた。

また、宇治茶師の各家は、家格や幕府との取引の多寡にかかわらず、諸国大名のお抱え茶師として御用達をつとめ、大名から扶持米（ふちまい）、その他の特権を与えられていた茶師も多かった。

明治維新に際して、幕府、諸大名という積年の顧客を失った茶師の痛手は大きく、茶業から離れるものが続出し、茶師仲ケ間の組織は瓦解した。

説明板より